

高官護衛から見る日中文化の違い

陳 波(経済学博士)

アジア近代化研究所研究員・中央大学経済学部助教

初めに

筆者が日本に来たばかりの時、大きな衝撃を受けたことがある。それは来日後一か月ほど経った頃、日本人の友人と一緒に都心・皇居へ観光に行った。昼頃、国会議事堂附近の街路に着いた。突然、数人の交通警察が、人が集まっているところに駆けてきて、敬礼した後、「たいへん申し訳ございません、車が通りますので、お気を付けください」と言いながら、またこちらに頭を下げた。

T君は私に、「たぶん要人が通るのだろう」と言った途端、3,4台の黒い高級車が静かに近づき、スピードを若干落とし、車の窓ガラスから車の中の人々が微笑んで何回も通行人に向かって小さくおじぎをしているのが見えた。そして車は通りすぎていった。「やはり要人だ」とT君はつぶやいた。車が通ってしまうと、数人の交通警察は再び頭を下げて、「不便をおかけして、たいへん申し訳ございませんでした」と通行人にあやまった。

僕は愕然とした、T君に、「さっきの車に乗っていたのが要人って、本当?」「車の色や警官の数から見ると、たぶん大臣レベル以上の高官だと思う」と日本人のT君は推測した。「そんなバカな。これが高官の護衛? この雰囲気ではとても大臣レベル以上の高官だとは思わないけど」と、僕は驚きを禁じ得なかった。T君は笑った。T君は中国に留学した経験があり、中国の事も良く知っており、「確かに中国の高官はものすごい護衛だよ」とT君は言った。

「日本で高官になりたくないね、道を通る時うしろめたいみたいに静かに隠れて通っているように見える」と僕は日本の高官に同情するような思いで言った。「この中には『悪い』ヤツもいるかもしれないぜ、それなりに悪いことをやっているよ」とT君は僕に反駁した。まあ、「悪人のすることはみな同じようなものだ」(中国語:天下烏鴉一般黒)と言われてるように、本質的にはどの国の官僚も似たようなことをすることは確かであろう。だが、国によって、官僚がしていることには形式的な違いがあり、その形式的違いが含んでいるいくつかの内面的な違いを表わしていることも、無視できない。

1. 北京への初めての旅

日本の高官護衛について、私が受けた衝撃は中国人であつたら、誰でも分かることであろう。来日数年前、出稼ぎ民工潮に巻き込まれ(当時、「民工」は「盲流」=盲目的な流動者と呼ばれていた) 広東省の外資系企業に入社後、今までとは比べものにならないほどお金に余裕ができたので、「我が国の首都北京へ行こう」と思い、春節が近づきさっそく10日

間の休暇を取り、北京へと飛んだ。北京に着くと、まず天安門広場に向かった。花崗岩の敷石を踏みながら、人民大会堂、毛沢東記念堂、人民英雄記念碑、中国歴史博物館と中国革命博物館（現：中国国家博物館）を回った。そして、毛沢東主席の肖像が掛かっている天安門城楼に向かった。壮大な城楼と毛沢東肖像の前で荘厳・厳肅の雰囲気を感じた。残念なのは当時城門に登ることは許されておらず、天安門から天安門広場の全景を見渡すことができず、下から楼閣上の国章や毛沢東の像を仰いで見るしかなかった。

その後、故宮博物館に入り、ゆっくりと見物した。その黄金色の瑠璃瓦から離れて出てきたところで、護城河の白い大理石の欄干を再び触ってみた。最後にベンガラ色の城壁に沿って歩き出した。約 100m 歩くと、一人の男性青年が障壁ぞいの花壇で小用を足していた。彼は私を見ると、バツが悪そうな顔をして僕に事情を説明しようとした、「何時間探してもトイレが見つからなかったもんだから。もう我慢できなかったんだ」と。私は彼の行動を見た瞬間に確かにたいへん驚き、違和感さえ覚えた。「すぐ近くに毛主席が厳肅に見ているのに……」と思ったが、彼の気まずい顔を見て、私の気持ちも和らいた。「確かに周りにトイレがぜんぜんないですね」と、ついに彼に同情してしまった。

まあ、多少の意外な事があっても、天安門広場及びその付近の観光はたいへん快適であった。翌日、朝早く香山公園に向かった。元々香山公園は北京市内から 20km ぐらいしか離れておらず、数十分で必ず着けるはずだが、結局 3 時間ぐらいかかって、香山公園に着いたのは 11 時すぎだった。何があったのだろうか。

2. 北京での高官警備

ミニバスが発車した約 10 分後に、バスのスピードが徐々に減速し、ついに停止し、運転手がつぶやいた、「ヤバい、また要人が来るのか」。バスの乗客は相次いで「またか」、「また偉い人物か」と不満げに嘆き始めた。中国の片隅にある四川省（当時、重慶市は四川省の一部であった。重慶市が直轄市になったのは 1997 年）出身で田舎者の私は、祖国の心臓である北京の荘厳さに威圧されたせいか、とにかく物言いとふるまいは謹んでいた。私が車の窓ガラスから眺めてみると、外には多くの警官が見えた。確かに交通警察だけでなく、数種類の服を着た警官がいる。完全武装の兵士も見えた。だから交通事故の発生や交通整理ではないだろう、と乗客は判断した。

「首長（＝高級幹部）の車が通る。すべての車は止まれ！ 歩行者は向こう側の小道から廻りなさい」と服に 4 つのポケットがある軍人が叫んだ（服に 2 つのポケットしかないのは兵士で、4 つのポケットは軍官である）。乗客もミニバスもしばらく黙った。

「お前、向こうの小道へ行くんだ！ 話が分からないのか、耳がちゃんとあるのか?!」警察は一人の中年婦人を追いかけて捕まえ、つれ帰ってわき道の人々の群れに押し込みながら、大きな声で中年婦人を叱った。中年婦人が苦笑しながら「道路は天に向かい、各々半分を歩くべきだ（中国語：大路朝天、各走半边）」と言い、抜け道の入り口でしばらく立ったままだった。「我々は自分の土地の道を歩く権利もない。人民が主人公か、官僚が主人公か。

……」と彼女は愚痴をこぼしながら、歩き出した。

北京の市民はすごい! 警察に向かって口答えもするんだ! これが四川だったら口答えなどして警察を怒らせたなら、警察の気分によっては拘留所行きか罰金だぞ! 巨大な中国の中の四川人の私は自分は田舎者だと思っており、北京人や上海人のような大都市出身者に会うたびに、私は即座に拱手の礼をして敬意を表す。警察や軍人の前で口答えする北京婦人を見て、北京人に対する敬意の気持が増すのを感じた。

高官の車が通るため、護衛の警備は道を嚴重に封鎖し、歩行者を分かれ道に誘導し、すべての車を待たせたのである。まあ、20~30分ぐらいで通れるだろうと思って落ち着いて待っていればいいではないか。歴史上でも官僚が通る時にドラや太鼓を鳴らし、「肅静」、「回避」のプレートが随行員に高く挙げられ、百姓の退避・畏縮が要求された。民本思想の主張者・孟子が「民を重しと為す。社稷これに次ぎ、君を軽しと為す(中国語:民爲貴、社稷次之、君爲輕)」と言っている。つまり、人民があって国家があり、国家があってこれを治める君がある。だから軽重をいえば根本である民が一番貴いと言うべきである。しかし、現実的には、中国数千年の歴史上で、一貫して「官尊民卑」である。

3. 役立つ「精神勝利法」

半時間過ぎた後、車や乗客を待たせたまま、一向に高官の車がやってくる様子はない。同じミニバスに乗っている多くの人々があちこちから口を出すようになった。1時間すぎると、さすがに運転手たちもイライラするようになり、「警察同志、首長はまだ来ないんですか」と聞き出した。隣の警察は「具体的には俺も知らん」と言った。「あなたの上司は知っているでしょう」と運転手はわざわざ大きな声で言った。そして、声が聞こえたその上司のような人は運転手に向かって、「首長は何かの臨時の用事があって、出発が遅くなった。よけいなことを聞くな。そのまま待てばいい」と命じた。官僚に叱られることや強烈な尊卑序列に慣れたのか、もっと何らかの情報が欲しい運転手も、むざむざと黙り込んだ。

1時間半後、同車の乗客はとうとう怒りへと転じた。「畜生、高官の時間は時間で、百姓の時間は時間ではないのか」、「俺はまた遅刻だ、上司にどうやって説明するの、がっかりだ」、「高官の護衛なんて、バカバカしい。市民の生活までに影響を与えても平気なのか」、「高官だから、住民に迷惑をかけるのは当たり前だと思っているようだなあ」、「俺たちは小市民だから、いじめられても仕方がない。せがれに力を入れよう、せがれを高官に育て挙げれば、わしはこんなにいじめられないだろう」、「それは甘いぞ。まず高官の親戚がいなければお子さんは高官までいけないぞ。お子さんは高官になっても、同じく俺たちをいじめろぞ、あなたに親孝行もしなくなるかもしれないよ」、……

突然、警官は「静かにしろ」と指示を出した。たぶん高官が間もなくくるだろうとみんなが分かった。みんなは息を殺して畏敬する気持ちを持って高官を待つことになった。その周りは急にシーンとした。そのあと、約15分後、黒い高級車数台がやってきて、スピードを落とさずに素早く通りすぎていった。好奇心の強い乗客や通行人は必死で高級車の窓

ガラスから中の人を覗いた。ミニバス附近の一人は「だからこんなすごい警護なのか。この人だったのか」と声を呑んだ。田舎者の私にも好奇心が湧いてきて、「誰ですか」と聞きたかったが、私の乗った車の乗客も怒りが充満していて、まったく「誰なのか」に興味を示さなかった。私も唾を飲み込んで、黙り込むしかなかった。

高官護衛の警官や軍人がもう少しそこにいて交通秩序を維持してくれればよかったのに、高官が通ると、彼らは急いで撤退して消えてしまった。歩行者や車が我れ先に動き出したため、渋滞になってしまい、そこで私の乗っていたミニバスは動けなくなってしまった。

11時過ぎにやっと綺麗な山林公園に着いた。途中で出逢った高官の通過のため、2時間半以上も遅くなった。天に怒ってみても何もならない。私は実は阿Qの精神勝立法(「阿Q正伝」魯迅〔著〕主人公阿Qは「精神勝立法」と呼ばれる独自の思考法を持っている。どんなに罵られようが、日雇い仲間と喧嘩して負けようが、結果を都合の良いように解釈し、心の中では自分が勝利者だとみなす方法)で自分の情緒を調節してみることにした、「20~30分しか乗らないはずのミニバスに2~3時間も乗った俺は勝利者だ、得をした」と。精神勝立法はよく効くもので、私の関心は公園の風景に転じた。

4. 重慶での高官警護

「改革開放」30数年以来、中国は急速に発展し、さまざまな変化を遂げてきた。経済面だけを見ても、大きな業績を上げている。今や、GDP(国内総生産)でも貿易総額でもFDI(外国直接投資受入額)でも、すべて世界第二位となり、従来貧しい発展途上国としては微々たるものであった対外直接投資でさえ、世界第六位になった。そのほかにも、中国が実現した大きな成功例は、枚挙に暇がない。しかし、一方で、中国で不変なものも数多く存在している。

筆者は2011年末に帰国した時、重慶でも北京で経験したことと同じ風景に出逢い、十数年経っても中国の高官護衛の雰囲気は何も変わっていないな、と実感した。空港から都心に入ろうとしているところで、運転手が突然「ヤバイ、高官がやってくる。道路封鎖だ。一々検査だ」と嘆きながら、車のスピードを落として停車した。僕が車の窓ガラスから外を見ると、北京で見た風景と似たような状況が見えた。完全武装の警察が十数人いて、バリケードを設置し、歩行人を別の道に誘導している。その歩行者が不満げな顔をしていて微かな抵抗も見えるが、警官は強い調子で、「協力しなさい。首長が重慶に来るから、首長の安全保護が第一だ。危険分子は拘置するぞ」と言い、歩行者にはちっとも迷惑をかけたと思っていないように大きな声で叫び、歩行者に警告を発している。

同時にまた、車の全面検査を行っている。「止まれ、安全検査だ!」とサングラスを掛けた警官が次々とやってくる車に向かって命じている。「お客さん、心配せずに、今日はラッキーだよ、たぶん20分ぐらいで済むさ。今日来るのは部長以下の中央幹部かもしれない。先日高官が来た時の警護に比べると、厳しくない方だから」と運転手が私を慰めてくれた。「しかも、まだ予備検査だけだ、高官がやってくるのは数時間後だと思うよ」と、運転手

が追加説明をしてくれた。幸いにして、運転手が言った通り、20分ほど待っただけで車は都心に入ることができた。

ここまで来ると、道を通る時の中国の高官護衛について、以下のようにまとめられよう。要するに、中国で高官がやってくる時には、まず、物々しく防備し、多くの警官や警備員を出動させ、嚴重な態勢を備える。次に、その警官や警備員は通行人に頭を下げ敬礼するどころか、こっちへそっちへと指差しながら、大きな声で指示を出したり、命令したり、怒号したり、罵ったりする。通行人の反応がちょっと遅かったら、押されたり、叱られたり、捕まえられたりする。「これから偉い人がやってくるぞ」と通行人は誰でも神経が尖らせられ、この危険な場から迅速に遠ざかるように指示され、畏縮させられる。

また、スピードを落とさずに高官の車が通る時、高官が車の中で厳肅で満足気な顔をするのも窓ガラス越しにちらっと見える。そのお高くとまっている彼らの様子は「俺様が通過するぜ」と小民百姓にわざと見せつけている。さらに、高官の車が通りすぎていくと、警官や警備員は急に通行人から目をそらし、「一件落着」と気軽に一服するか、クモの子を散らすようにどこかへ逃げてしまう。通行人に迷惑をかけたことであやまることがまずないし、彼らは謝ろうとすら思っていない。高官の護衛だから、普通の百姓の行動の制限や不便をもたらすのは当たり前のことだ、と彼らは考えているに違いない。

5. 高官護衛に見る中国と日本の相違

私が高官護衛自体に反対しているというわけではない。古今東西、高官の護衛の歴史的淵源は深い。日本でも平安時代、左右近衛府の官人・舎人から選んで高官の護衛者にしていたし、古代ローマには皇帝の親衛隊がいた。いわゆる民主主義のアメリカ大統領の護衛もよく見かけるように、すごい態勢である。そういう意味で、社会体制的な違いを超えた高官護衛には、その必要性もあることは明らかだ。しかし、その場合、一つ重要なところに留意しなければならない。高官護衛は庶民の日常生活に影響を与えるかどうかという点である。そこから「官」と「民」の関係と性格が見えてくる。

近年日本における官僚批判は盛んに行われており、官の力を小さくすることこそが官僚改革の根幹だと主張する人も少なくない。一方、中国では今のところ、官の力を小さくすることはまったく非現実的なものと考えられている。官は官であるというだけでカギカッコ付きの「偉い」存在なのである。民より官のほうがずっと偉い。官尊民卑の官僚支配国家なのである。高官の護衛の様態がその明らかな証左である。「民尊官卑」は今後長期にわたって少しでも改革されることはまったくの望み薄であろう。

中国でも日本の明治以降（とくに戦後）と同じく、一応、官僚は人民の「公僕」であると規定されている。中国の高級官僚は人民の「高級公僕」であるはずだが、高官のふるまいとその護衛から見ると、彼らの本音は「俺こそ人民の主人公」だという、誤った考え方を身に着けているように見える。この点から日本の高官護衛を見るだけでも、少なくとも形式面において、「官尊民卑」ではなく、「民尊官卑」になっており、中国よりはるかにま

しであろう。

河野健二が「明治の変革は、『西洋』への抵抗と同化の過程である。それは抵抗であるかぎり、アジアと運命を共通にした。しかし、同化であるかぎり、アジアをぬけ出て、アジアに対抗した」と指摘している（『現代史への視座』1972年、中公叢書、p.186）。1978年からスタートした中国の改革開放を日本の明治維新に例えれば、改革開放は同じく、「西洋」への抵抗と同化の過程であろう。それが抵抗であるかぎり、途上国と運命を共にするはずである。しかも、略奪無き「勤勉革命」による工業化を成し遂げてきた中国でなら、対立や戦争の道は避けられよう（ジョヴァンニ・アリギ『北京のアダム・スミス』）。しかし、同化であるかぎり、先進国との付き合いを避けずに、融合していくことになる。そのため、多くの西洋からの文明を締め出して、自国への批判に過度に警戒するより、西洋における一般的な普遍価値を積極的に取り入れた方がより賢明ではないであろうか。

ましてや、中国の古代哲学にもはっきりと民本思想が築かれている。「官尊民卑」を弱めて「民尊官卑」へと徐々に転換していくべきである。これは近代化の要求の1つでもあろう。中国における高官護衛のもたらした百姓に対する影響や迷惑などは1つの小さい出来事にすぎないかもしれないが、中国の近代化の遅れの表現の1つであろう。これに関して、一衣帯水の隣人である日本の高官護衛は、少なくとも形式を見るだけでも日本が「官尊民卑」の段階にとどまっていないことは明らかである。日中における高官護衛の相違は両国の現段階における文化の差異の一側面をはっきりと現しているように思えてならない。

最後に

以上で、私が高官の護衛を通じて経験した日本と中国の相違について考えてみた。経済的には中国は今やどこから見ても世界第二位にランクされ、経済的には近代化を大きく実現してきたが、他の面からどの程度近代化したかを見ると、若干問題があるように思える。その1つが、政治の民主化の問題である。私が日中間で経験した高官警護を通じて、この問題を見ると、日本にははっきりと民尊の姿勢、すなわち民主化の進展が見えるが、中国にはそれがほとんど見えない。中国にも民を尊重すべきだとみる思想はある。民尊は近代化に通じるだけに、西洋文明を否定するだけでなく、西洋文明への同化過程を歩むべきではないか。それが長期的に見れば、中国の国民にも官僚にとってもいいことではないかと考えるが、いかがであろうか。